
姉サンに発情中

お空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉サンに発情中

【Nコード】

N5016V

【作者名】

お空

【あらすじ】

波乱万丈な人生を送っていたせい、か歳の離れた別居している姉・美代のことをよく知らない弟・慧斗^{けいと}。しかし母親が末期のガンだということを知り、しばらく実家に居ることになった姉。ところが慧斗は実の姉に心を奪われてしまった…。

ブローグ

僕が小1のとき、ずっと看病してくれた。

そして冷たいプリンを食べさせてくれたっけ。

それが、7つ年上の姉さん、美代^{みよ}の記憶。

読書をしている僕のことをちょっかいだしてきていつも争いが絶えなかった、

そしてケンカの種をまくのは6つ年上の姉さん、加代子。

…故、だ。

思いだしたら泣けてくるからやめておく。

そして毎日メールしてくる他校の幼馴染の

（家が激しく近いから、僕の秘密を色々知っている）、加織。

僕はこの女性の誰かと、夜も眠れなくなる程いとおしく想えるひとがこの3人の中にいるなんていま思えば思ってもいなかった。

思い出

僕は、部屋の片づけをしていた。

机の上が、物であふれかえっているからだ。

僕、早川^{はやかわ}慧斗^{けいと}も、もう中2であって、

来年は受験で勉強しなくちゃいけない。

なのに、マンガやら色々あったらやる気にもならないからだ。

慧斗は、学校で配られたPTAのプリントを見もせずに捨てていった。

捨てられない性格ではないが、何事にも一氣にやるタイプだ。

「いつてえ！」

慧斗の足元に、アルバムらしきものが落ちてきた。

マンガである、「残業時に資料で山積みになっている机」の絵のよ
うに、

片づけはなかなか終わらない。

アルバムを開けてみた。

姉さんの、笑顔の写真があった。

しかし慧斗は写真を捨てた。

いまさら、姉貴に会うこともないだろう。

なんたって、勘当された当然の長女なんだから。

次女の姉さんも、もうこの世にいない。

早川家の子供は僕だけだといっても過言ではないし。

そう思いながら、掃除が面倒になってきたので昼寝の準備をした。

幼馴染の加織からメールがきていたが、無視した。

いつの間にか眠りについていた。

電話

起きたら、18:00をまわっていた。

そうだ、今日は夕飯の準備をしないと小遣いがもらえないシステムになっていた。

正式には、今日こそ夕飯の準備、だが。

急いでエプロンをつけ（本当は嫌だがこれは早川家の決まりだ）、手を洗った。

野菜室にある人参をとろうとした瞬間だった。

電話が鳴った。

あのごくごく普通の「プルルル」の音が。
リビングまで小走りでとりにいった。

「もしもし、早川ですけど」
やはり電話の最初は昔ながらの「もしもし」に限る。

「慧斗、今日の夜、大事な話がある。遊びに出かけんなよ」
父親だった。声のトーンが暗かった。

「行くもなにも今日は夕飯準備だから」
僕は不思議で仕方なかった。

「まあ、いい」
落ちついた声だった。

向こうから切った。

一体どうしたんだ？電話で言えない事情でもあるのか？

…まさかりストラクラったとか？

なんて考えながら、肉じゃがを作り始めた。

肉じゃがは、僕の好物なのだ。

単純である、僕は。

肉じゃがは男の胃袋をつかむ、というけれどまさにその通りだ。

慧斗を慣れた手つきで夕飯を作った。

肉じゃが

そうこうしているうちに、父さんが帰ってきた。ちょうどできた料理をよそっているところだった。ナイスタイミング、まさに親子。

「おかえり。いまできたところ。食う？」

エプロンを脱ぎながらリビングへむかう。

「…ああ」

父さんはやけに暗かった。

テーブルに、はしと茶碗、肉じゃが、炊飯ジャーを置いた。

母さんが用意するときには他にも醤油やらサラダやらなんやらあるのだが、

面倒なのでこの4点セットしか出していない。

「いただきます」

男親子ふたりで食べるのはきまづい感じもした。

茶碗をおくカチャ、という音しかない。

よし、ここはテレビに助けてもらおう。

そう思ってリモコンをとろうとしたときだった。

「待て、話がある」

父さんがやつと口を開いた。

僕は何も言わなかった。

「単刀直入に言う。これはこれから先お前の人生にも関わると思う。

真面目に聞いてくれ」

おお、やっぱりストラされたんかいと思った。

けどいつも仕事から帰ってきてビールをグツと飲む、あの父さんと違う表情だった。当たり前だが。はじめてみる顔だった。

沈黙が続いた。

なんの音もしない。

「母さんはガンだ。」

本当に単刀直入だった。

告白

ガン。

母さんが。

頭が真っ白になった。

「恐怖」が迫ってくるようだった。

「え……」

それでもうまく状況を飲み込めない僕に
父さんは構わず続ける。

「乳がんだそうだ」

がん。日本の死亡率？1はがんじゃなかったっけ？
混乱して、耳に入ってこない。

でも父さんに聞きたいことはまっさきに思い浮かんだ。

「治るんだろ？あの髪が抜ける薬でさ」

僕は冷静になろうと思った。

その結果がこの言葉にたどりついた。

「……ああ……でももっと早く早期発見できていれば……」

父さんはポロッとつぶやいた。

もちろん、慧斗は聞こえていたし、その意味を理解してしまった。

長く暗い沈黙が続いた。

せっかく僕の大好きな肉じゃがなのに、味がしないようだった。
まるで、なにか綿を食べているように感じた。

告白（後書き）

読んで下さり有り難う御座います^^
まだ続きます^^

気分

沈黙を破ったのは、父さんからだった。

あの沈黙をたとえると「無彩色」だと思う。

「母さんにストレスかけるなよ」

一言だった。

「分かってるよ」

これが妥当だろう。

「あとひとつ、慧斗に言わなくてはいけないことがある。…お前の姉さんが帰ってくる」

「は？」

「母さんが治るまでこの家に居てくれることになったんだよ。お前は覚えてないかも知れんが、お世話になってたぞ」

「姉さんって…勘当されたんじゃないのかったのかよ」

意味がよく理解できない。特に、このとてもなく重い話の後だと。

「仲良くするんだぞ」

とても、そんな気にはなれなかった。

突然

母さんがガン。だからあまりよく知らない実の姉が実家に戻ってくる。だから、「仲良くしろよ」。

いや、おかしいだろ。

そんな気分になれるわけない。まずありえない。

簡単にコロツと福笑いみたいにチェンジできるスーパーマンみたいな奴見てみたいくらいだ。

そしてこの表現もありえない。

とにかく、いまは母さんのことで頭がいっぱいになっていた。ファザコンとかじゃない。

僕の家族はもうすでに1人病気で失ってるんだ。

僕の6つ年上の姉、加代子^{かよこ}。生きてたら…20歳。酒も飲めずに逝ってしまった。

5人家族で2人病死だと？

ホラーか、これは。

そんなことを思いながらソファでゴロゴロしていると、電話が鳴った。

全くこんなときに電話って鳴るもんだ。

電話をとった。

「もっしー、父さん？」

女の声だった。

テレビを消した。

ちっ、僕の好きな沢尻エリカがでてたのに。

それにしても「もっしー」なんて、いやに気が合う女だ。
僕も電話の最初は昔ながらのフレーズが一番だと思う。

「もしもし、早川ですけど」

この女の声の主は父さんの浮気相手だろうか？

「あ、もー！慧ちゃんじゃーん！忘れたのー？」

成長した、電話越しの“姉さん”の声だった。

姉貴

「ねえ…さん」

びつくりだ。本当に。

「慧ちゃん、明日の18:00に着くって、父さんに言っといてね！じゃ！」

早川家は、なぜか自分からはぱつと切る特質があるようだ。
まあ、僕もなんだけど。

よく考えてみる。

“慧ちゃん”

と呼ばれた事。そこで本当に、弟だったんだ…と自覚してしまう。

そのときは特に、会いたいとも会いたくないともなんとも思わなかった。

電話での共通点が2つ見つかって、安心したからだろうか？
それとも、声が聞けたからだろうか？

この問題は、永遠分らない気がする。

姉貴（後書き）

アクセス解析とかいう機能をクリックしました。
びっくりしました。

初心者なのにありがとございます。（mm
mm

人生

姉の人生は多分、

中学はめっちゃめっちゃ頭のいいところへ受験し、寮住まい。

その時点で僕は6歳だった。

姉の15の誕生日のとき、加代子姉さんが永眠、…亡くなった。

“なんで、加代子をこんなひ弱な体に産んだのよ！！！”

その吐き捨てた言葉はあまりにも理不尽で悲しい叫びだった。

僕はなぜか覚えている。

姉は加代子姉さんが亡くなったのは母親のせいだと決めつけた。

中学のストレスからは世間でいう“不良”となってしまうた。

家出が当たり前、ほとんど家には帰らなかった。

大学で心を入れかえたのか、レベルの低いような、一般的な

神奈川県の大学に入った。神奈川県での一人暮らしは充実していたんじゃないかと思う。

そして、いま。母が、がんのため、帰宅。

メール

中学は寮生活。

高校は家出の日々、親とは勘当、当然な関係。

そして大学では心を入れかえ神奈川県へ一人暮らし。（ちなみに僕は兵庫県の都会に住んでる）。

7つも年上の姉。

会ったことはもちろんある。

夏休み、お盆、正月、…。

だが、機会が少なすぎる。血はつながっていても、一緒にいた時間は兄弟として少ないような気がする。

寮での一時帰宅があっても、僕は用事があったり、姉さんが外泊したり、色々すれ違っていた。

メールがきた。

加織からだった。

『慧 寂しい』

と打たれていた。暇だったから、

『どうしたんだよ』

ってかつこよく返信してみた。

1分後に返信がきた。

相変わらず返信が早いやつ。どんだけヒマ人なんだよ。

受信ボックスに当たり前だが一件。

『返信してくれて、ありがとう
ですって。』

加織らしくねえな、いつもは絵文字やらデコメとかゆう装飾を
つけてくるのに。

…いつものは、「返信遅い！」とか「何してるのー？」系のメール
しか送られてこないから、僕が無視していたのだ。

珍しくそっけない文章だった、が、おさななじみの加織を可愛い、
一瞬でも思った僕だった。

性欲

加織とのメールは続いた。

「お礼なんていわなくていいよ」
『ううん、最近慧斗忙しいの？』
「まあそんなところ」
『体には気を付けてね』
「さんきゅー」
『あたし、慧斗の体に触りたい』
「どうしたんだよ急に」
『分かんない…』
「加織ってどんくらい成長したの？」
『どれくらいだと思う？』
「わっかんねーな、加織成長遅い方だったし」
『くだよ』

お互い、超早返信で卓球のように返していた。
ちなみに下ネタをふったのは僕からだと思う。流れるに。
加織のことだから、冗談か？と思った部分もあったが、いまのところ正常だ。
いまのところ……。。。。。

が。

Ｃ、か。中２で、Ｃ。

いや、胸のサイズの話だよな、これって、うん。
デカい方…なのかな？

他校（加織は受験している）、だし登校時間とか時間がずれるから最近滅多に会ってない。分からない。

僕も男だ、考えれば考える程興奮してしまう。

「揉みたくなんだけど」
悩みに悩んだ末、３分の間を開けてこう返信した。

こうすれば失礼はないだろうと思って。

いや、揉みたいですよ、もちろん、ええ。

本当はいますぐ会いに行つて抱いてやりたいくらいです、はは。

（それは加織が処女だからだ、絶対。とか言ってる僕はチエリーくんだが）。

『わたしのコト好き？』

このメールにはさすがに悩んだ。

幼なじみ

幼なじみに

「私の事すき？」

と聞かれてみんなはどう答えるだろうか。

会話なら、「なんだよ」とか「んなわけねえよ」とかいうかも知れないが、メールでの返事には困ったものだ。

相手の表情が見えないからマジに思われても気まずいし、（笑）をつけてもバカにしているように見られるのもあれだ。
かといって「本当かよ？」って返すのもなんだか悪いような気がする。

悩んだ、すごく。

10分くらい経っただろうか。
携帯から電話がかかってきた。

やべえ。

着信音と共に一番最初に思ったこと。

「もしもし、加織？」

「慧。もういいよ」

切られた。
キレられた。

別に、そんなに怒ることないじゃないか、たかが10分だぜ？
そうも思ったが、申し訳ない気持ちも若干だがあるような気がする。
数年ぶりのケンカだと気付いた。

だけど、その夜はぐっすり眠れた。

再会

朝、目が覚めた。あのままぐっすりと眠ってしまっていた。
加織とケンカしたのにも関わらず。

とりあえず、顔を洗って、ごくふつうのＴシャツとＧパンに着替えた。

これが僕の部屋着だ。

リビングへ向かった。

朝ごはんが、置かれていた。
父親は出かけたのだろうか。

パンを焼こうとしたときだった。
ピーンポーン、とベルが鳴った。
こんな朝早くから客か？まあそれはないだろう、新聞の料金を
回収しにきたのだろうかと思った。

ドアを開けた。

茶髪で、化粧をしている女性が現れた。

「あ、慧ちゃんじゃーん」
その“女性”は言った。

会話

「は、はあ…」

慧ちゃん、か…。

「あらやだ。覚えてないの？まつ、あがるね」

そう言っつてつかつか部屋に入ってくる。

僕は仕方なくお茶を出した。

「気いきいてる。どうゆう教育受けたの？あたしと大違い」
姉さんはリビングのイスに座った。姉さんの席だった。

「それは、まあ」

「もう。もつと楽しみにしなさいよ。緊張しなくていいのよ」
お茶を飲みながら僕の目をみて言った。
緊張ってというか、愕然としてるだけだ。

「なによ、どうしたの？」

僕は何も言っつてなかったけど何か言いたげな顔をしていたようだ。

「なに？オバサン」

僕は言った。

「オバサンじゃないし！まだピチピチの21ですから」

姉さんの反応は驚くぐらい早かった。

「まあまあ」

「もう」

話しやすかった。

本当に“姉さん”なんだなと思った。

それと同時に本当に帰ってきたと自覚した。

容姿

姉の格好は、茶髪（いまどきの、黒が混じっているような）に耳にイヤリングかピアスを（僕は装飾品にあまり詳しくない）、つけていた。

髪は肩まであって、ロング。

化粧はそこまで濃くないが、自分にあった化粧、って感じだ。

別にそこまで美人でもない。

昔から、そこまでかわいい！って程でもなかった。

だけど、大人になって姉が明らかに：

美しくなった、と弟からの僕でも思う。

掃除のとき（あ、そうだ。まだ掃除は完了していなかった）に捨てたあの笑顔の写真とは

全然違う。あのくしゃくしゃな笑顔は、変わった姉から見れるのだろうか？

…僕は、そのあと、姉とSEXの夢をみることになる。

SEX

何故か、姉さんはリビングにいた。
白いYシャツにミニスカを着ていた。
足を組んでいた。

…ミニスカから、下着を覗かせていた。
純白なシャツも、思いつきり透けている。
僕の目は胸元やら脚やら…にいつてしまう。
男の本能だろうか。

僕は言うに言えないことでトイレへ駆け込んだ。
男の子事情である。

くそっ、弟を誘ってるつもりか？あの女は。

部屋にもどると姉がいた。

「ねえ」

いやらしい声で僕を見る。
急に服を脱ぎだした。

21歳の肉体は中2の僕にとって、その。やっぱりこのやめた。

激しいsexが始まった。

姉さんが僕にキスをしようとしたときだった。

目が覚めた。

目覚まし時計とかいう永遠の宿敵から起こされた。

（あの、ジリリリリと鳴る悪魔の叫びに。）

…ゆめ、だった。

夢。

不覚。

SEX（後書き）

この夢の織細は番外編で書かせて頂きます。

不覚

昨日、父さんがいなかったのは姉さんを迎えにいくためだったらしい。

姉さんは地元の友達に挨拶に行つて、あれから帰ってきていない。飲み会でもしたのだろう。

予定時間よりも早く来たのはそのためだったとのこと。
その友達の仕事が忙しくて、早く来なければならなかったのだと言っていた。

別に、それはいい。

だけど、あの夢。久しぶりに再会した姉さんをそういう風に見ていたのか、僕は。

ありえない。

本当に。

僕が。

時計に目をやると7:00だった。結構早く起きた、久しぶりに。姉さんが帰ってきて、もうすぐで24時間になる。気まずい、全く。

帰ってきたら、平常心、平常心。

邪魔

午前10:00に姉が帰ってきた。

予想通り、飲み会で盛り上がったらしい。
それでも二日酔いにはなっていなかった。

「ただいま」

姉さんが言った。髪を後ろに1つ束ねていた。

「…おかえり」

だから、僕！平常心って決めたじゃないか。

姉さんは玄関からリビングに向かった。

あの夢を思い出してしまった。

部屋で勉強しよう、すべて忘れよう。

そう思って、部屋に戻った。

よし、ここは僕の大っきらいな英語の課題をやっつけてやろう。

こういうときにこそその英語だ。（大体、僕はずっと日本にいらんだから英語なんて必要

ないと思う）。

いざテキストを開けてみると、さっぱりだ。

それでも僕はシャーペンを持つ。

「…わっかんね」

やはり嫌いなものは嫌いだ。

「慧ちゃん」

姉さんが、僕の部屋のドアから顔をぴよこつと出した。

加代子姉さん（何度も言うようだが、故、だ。ちくしょう）みたいに邪魔する気か？

と思った。

勉強

「教えただけよっか」

姉さんが得意そうに言った。

「できんの？」

高校時代不良だったのに、純粹に不思議でたまらなかった。

「あたし英語得意なの。慧ちゃんと違ってね」

束ねていた髪をほどいた。サラツとしている。

前に流行ったごくせんとかいうドラマみたいだった。

（僕は見たことがない。ルーキーズ派だから）。

「へえ」

なんだかよく分からなかったが納得できた。

姉さんは僕の部屋に入った。

そして、僕の横に来た。

机に手を置いて、テキストを見た。

「単語と基本文覚えたら？英語は書いて覚える！」

でた、姉さんのドヤ顔。

「へいへい」

でも有難かった。

「それ、中1の問題。be動詞と一般動詞。」

姉さんが指摘する。

僕に近づく。

勉強机が急に狭く感じた。

多分、それは姉さんがもたれかかっているからだ。

慧斗の視線はふいに姉さんの胸元にいつてしまった。

（姉さんはテキストを見てるからバレないと思ったからとかじゃない
くて、

本当に、不意だった。）

シャンプーのいい香りがした。

姉さんが髪をかきあげたのだ。

真面目な目で、僕のテキストを見て教え方を考えていた。

美しい、と思った。

魅力

姉さんを美しいと思った。

でも、別に変なことじゃないと思う。

だって、成長したんだから。

それは、客観的に、っていう意味で。

…たぶん、絶対。

そう自分自身に思いこませた。

「そう、だからこうなるの」

姉さんの教え方は上手だった。

あの、英語の先生のうるさい教え方より、全然。
発音も上手だったから、どんどん頭に入った。

「うん！やった、できるじゃんっ」

姉さんは嬉しそうに笑った。

その瞬間だった。

あの捨てた写真の笑顔をしたのは。
くしゃくしゃな笑顔のあの写真。

「うれしい」
姉さんは言った。母さんみたいな口調で。

笑顔。

でもあの写真に比べて成長していて。
かわいらしいというか、美しかった。

と思った。

好き

戸惑い

「ちよつと、ジュース持つてくるね」

姉さんはそう言って部屋からでた。

きつと冷蔵庫にあるオレンジジュースのことだろう。

好き、と感じた。

実の姉なのに。

血が繋がっているのに。

歳が離れているのに。

勉強を教えてもらったただけなのに。

歳は関係ないか？とも思う。

それはいまぐらいの歳の子が年上に憧れる、と同じ気持ちかも知れない。

だったら、まだいい。それは精神的な面で正常であるということなのだから。

でも、恋だったら？

第一、この気持ちは何なんだ？

自分でもわからなかった。

答えは出なかった。

きつと、いくら考えても答えはでない気がした。

慧斗は机に頭を預けた。

ゴツツと音がした。

痛てえ、と思った。いつもこの部屋の机周辺でぶつける。

（恨みでもあるんだろうか？）

慧斗は考えながらも、姉の顔が浮かんだ。

姉さんを好きになっちゃいました。

姉さんが戻ってきた。

オレンジジュース1つ持ってきた。

デカイビールのジョッキに缶2本分が入ってるみたいだった。
なぜジョッキ1本に入れるかなんて知ったこっちゃないが。

「…僕の分…」

「ない。」

姉がジュースの飲みながら即答した。

「ひでえ！」

「いいじゃない。こっちが教えてるんだもん」

やっぱりこのサマだ、と思った時だった。

「うそ。これ、慧ちゃんのだし」

そう言って、僕に飲ませた。
…間接キス。

「うまつ」

ポンジューズだと判断した。

「でしょ？」

また、その笑顔。
守りたい、好きだ。

そう思った。
きっと、

恋に落ちた。

「……」

時間が止まったようだった。

「どうしたの？」

「いや、ポンジュースがまずかったら日本は終わったようなものだ
よ」

僕は言った。

…ときどきしながらも。

「はは、確かに」
笑い合った。

「もう12時なるし、おひるごはんの準備するね」

「僕も手伝うよ。」

「ありがと」

姉が微笑んだ。

普段、昼ごはんの準備なんてしないのだが、姉さんのその笑顔が見
たくて、言った。

もう、“きょうだい”だってなんだっていい。

姉さんは女で、僕は男。

だから、なんだっていいじゃないか。

異性に恋におちて何が悪い。

二次元に恋してるわけじゃない。（だからって悪いというわけでもないが）

叶わない恋だけど、

ただ――…

美代のそばにいたい。

昼食

姉さんと、目玉焼きをつくることになった。
簡単で、おいしいということだ。

僕が冷蔵庫から卵をとってくる。

その間に姉さんはフライパンを用意した。

あれ、フライパンの場所は変わってないね、と独り言を言っていた。

「慧ちゃん料理の手つきがいいね」

と姉さんが言った。

姉さんが家出したときも、神奈川にいたときも僕が作っていたときも
少なくなかったからだ。

「誰かさんのおかげで」

そう言つと、

「ふん、なによ」

と言り返す姉さん。

再会して日にちは経っていないのに。
なんでだろう。

どうして、人はこんなにも簡単に心を奪われてしまうのだろう。
気の迷いなんかじゃない。1秒ずつ姉さんへの「好き」が溢れる。

姉さんをつくった目玉焼きは、いままでの目玉焼きで一番美味しかった。

片づけも、協力してやった。

姉さんが食器を洗う姿は、お母さんに似ていた。

微笑み

「そういえば、慧ちゃんが小さい頃、熱をだしたときがあったね」

「ああ、うん」

僕も覚えていた。姉さんが看病してくれた。

「そのとき、せっかく寮から帰ってきたんだけど、慧ちゃんの看病することになって。」

正直面倒だと思ったのよ。慣れない寮生活からやっとな帰ってこれた
ー、って思ってたから」

「…ふうん」

姉さんが、そういうことと思ってたなんて知らなかった。

「でも、あんまり構ってあげられなかったのに慧ちゃんが“お姉ちゃん、行かないで”って

言ったのよ、高熱なのに。私は、コンビニに行こうとしただけなのにね」

はは、と笑う。

「そのとき、私、すっごく嬉しかった。小学校のときは受験勉強で忙しかったし、

なかなか慧ちゃんと遊んだことも兄弟のわりに少なかったのに、こんな私でも、慧ちゃんのお姉ちゃんなんだあって。」

僕の心はなんだか温かくなった。

小さい頃は加代子姉さんと遊ぶことが多かったから。

愛するひと、が、思い出話を僕が目を見て話している。

「そんなことも、あったね」
姉さんが締めくくった。

その微笑みは、天使のようだった。

微笑み（後書き）

お盆休みですね^^

ちよつと更新お休みするかもです。
みなさん、良い休日にして下さい

季節（前書き）

長い夏休み明けの投稿です。
これから是非お願いします。

季節

あれから、一か月が経った。

僕は学校が始まって、姉さんは母さんの病院と勉強の繰り返しだった。

僕の気持ちは、揺れないまま。

義務教育。

給食のエプロンを家に持ち帰るのは苦痛だった。

「中学生」。

どうせ僕は中学2年生なのだ。

その前に、姉さんを好きになることが問題なのか？

そのことに関しては構わない。

ピンポン

誰か来た。着信音の、「プルル……」と同様、
聞きなれたチャイムが鳴った。

「はい」

僕はドアを開けた。

「あ、慧斗」

加織だった。

「……なに。」

正直、姉さんかと期待していたが、見事に奈落の底だ。

「話があるんだ」

加織はいつもと違う笑顔で言った。

女子

「あのね、今日親いないんだ。一人じゃ怖いから泊まりに来てよ」
加織はそう言った。確実に。

「はあ？何言つてんだよ。友達呼べよ。つか怖いとかお前は幼稚園児か」

僕のホントの気持ちは違った。ちよつとドキドキしていた。色んな意味で。

「ね、お願い。」

昔からの、お願いしたら自分から下がらないこの性格。

「つたく…」

小学校の時は、よく加織ん家にも泊まりに行った。

加織が泊まりに来たりもしてた。

でも、僕には姉さんがいる。片想いだけど。

「慧斗、誰にも言わないから。だってあたしたち他校生同士じゃん。気まづくなったりしないよ？」

加織、お前はバカか。

「俺らは幼馴染だろ？」

「関係ないよ。逆にいえば幼なじみだからでしょ。会うことも少なくなってきた。」

「それは事実だけど…」

僕の負けだ。悔しい。

「
決まりね
」

誘惑

僕は加織の家に泊まることになった。
姉さんはバイトだし、父さんは仕事。加織の家に泊まることの口実
や言い訳は必要なかった。

僕の家から数秒。

家は近いのに、中学校変わってから、会う事が滅多になくなった。
そんな久しぶりの、加織の家のおい。

家庭的で、優しい雰囲気。

しかしその家も両親が出かけてるせいかな冷たかった。

「さ、あがつて」

加織は靴をぬぎながら言う。

「久しぶりだな」

遠慮なく僕はあがつた。

「あたしの部屋来てよ」

「どーせぬいぐるみだらけの部屋だろ」

「あら、そうかしら？」

入った瞬間。

女の子の部屋だった。

最後に入った記憶は小学校のころ、アニメのぬいぐるみや人形ばかりで散らかっていたあの部屋。

その部屋がピンクの写真だてや、ノートパソコン、ハンガーにかけてある制服…。

変わっている。

「まあまあだな。」

「何よそれ、素直じゃないなあ」

その瞬間だった。

ベットに押し倒されたのは。

「ねえ、慧斗」

「…んだよ」

「好きにしていんだよ」

「…本当かよ」

「慧斗なら、なんでもいいよ…」

しばらく見ないうちに、女っぽくなったなと思った。

童貞

不覚ながらも、僕のは加織にいられたらしい。

*

「んっ…。」
激しく、出し入れする。

加織の表情が、余計、燃えさせる。
僕だって当然、中2で童貞卒業するなんて…思ってもみなかった。
まさか、その相手が加織だなんてことも。

「慧斗ッ…！」

そのあとの事は考えられなかった。
真っ白になって、…気持ち良すぎて。

*

「加織って、処女じゃないんだ」

「…そうだよ。」

加織は下着を着ながら答えた。

「へえ…」

「そのこと知ってるのは、慧斗と、あたしと、今までの相手、よ」
振り返った加織の顔は、言葉にできなかった。

気がつけば3：00だった。

もう姉さんはとくに帰って寝ているだろうか。

姉さんが家にいる間 僕は加織と1つになった。
あの時姉さんは、何をしてたのだろうか？

恋文

家に帰ったのは、7：00だった。
加織の両親が帰ってくるのは8：00頃みたいだから念のため一時間前に。

姉さんは家にいなかった。

ちよつとガツカリな気持ちもあったが、あの夜のこともあったせい
か、
いなくてホツとする気持ちの方が強かった。

部屋に戻って、宿題でもしようか。明日は学校だし。
机につくと、衝動的に手が動いた。

「姉さんへ

僕はあの時姉さんが帰ってから、好きになりました

「姉貴」としてじゃなく「美代」を見てます

だから僕のこと「かわいい弟」じゃなくてちゃんと男として」

コピー紙に気がつくを書いていた。

女々しい。あり得ない。

だけどその後の文は、ちゃんと男として見てほしい。愛してる。だ。
さすがにこれは書けなかった。

英語の宿題が大量に出されていたことを思い出した。
そのラブレターはゴミ箱に捨てた。

それから僕は友達とバッテリーセンターへ遊びに行った。

外出

「ただいまー」

美代が買い物から帰ってきた。

早朝の市場で安くて新鮮な食材を買ってきたのだ。

「あつれえ？誰もいないのかな」

慧斗がいる、と思って独り言のように言った。

昨日、慧斗がいなかったことに關して疑問はもたなかったが、やっぱり少し心配になってきた。

美代は慧斗の部屋に入った。

ふとゴミ箱に目がいった。

新発売のクッキーのごみが捨ててあった。

「うっわ！これ！新発売したやつじゃん。あいつー、一人占めしたな！」

その横に、コピー紙が捨ててあった。

美代は、コピー紙を捨てるという行為に疑問をもった。

発見

美代は、好奇心から捨ててあったコピー紙を手にとった。こつ書かれていた。

『姉さんへ

僕はあの時姉さんが帰ってから、好きになりました

「姉貴」としてじゃなく「美代」を見えます

だから僕のこと「かわいい弟」じゃなくてちゃんと男として』

慧斗の字だった。

美代は見えてはいけないものを見てしまったと思った。

美代の気持ちは決まっていた。

*

僕は友達と別れたあと、寄り道せずに家に向かった。
なんだか姉さんに会いたい気分なのだ。
あのかわいらしい女の人に。

ウキウキした気持ちでいつもと変わらない玄関を開ける。

「ただいまー」

リビングに直行すると、姉さんがいた。

TVを見ながらお茶をしている。

「あ、おつかえりー」

振り返って笑顔で挨拶する姉さんは誰よりも可愛い。

あの夜の、加織が振り返ったときより全然、比べ物にならない。

「へー、そのせんべい美味しそうだな」

食べようとした、そのときだった。

姉さんの唇が僕の唇と重なったのは。

よるのそら

姉さんからの“キス”。

やわらかいキスは、強引に変わっていった。

「んっ」

舌が絡み合う。

「ちよっ……」

驚きと嬉しさが僕の中で踊る。

「慧斗。私の事好きなんですよ」

「えっ……」

「見ちゃった。コピー紙」

僕は恥ずかしさで消えなくなつた。
こんな羞恥は初めてかもしれない。

姉さんが電気を消した。

「私、あれが嘘でも構わないよ。」

薄暗い中、姉さんの初めてみる表情^{かお}。

「俺、姉さんのこと」

ここまできたら言おう。

別に隠す必要ない。

むしろ、やっと伝えられる最高のチャンスなんだ。

「俺、姉さんの事好きだ」

「ありがとう」

姉さんは僕に深いキスをする。
ずっと、このまま時が止まればいいのに。

閉まってないカーテンから月が覗かせる。
その月明かりだけが僕らを包んでるようだった。

本当のセックス

姉さんは僕のベルトを緩めた。

意味は分かった。

いや、姉さんと初めての深いキスの時から、分かった。

加織とは全然違う、姉さんの体。（加織も良い体はしているが）。
大きい胸も、くびれのあるスタイルも、全部興奮する。
きつと姉さんだから。

「慧斗・・・」

その声も

表情も

抱きしめるその腕も

美代の1つ1つが好きなんだ。

「あつ」

「んんっ・・・」

腰をふる度に聞こえる、可愛い声。

姉さんも、そんな声出すんだな。知らなかった。今までは。

「美代ッ…綺麗だよ…」

快樂の中、僕は美代に囁いた。

何時間が過ぎただろう？

熱くて激しいSEXは、人生の中で一番幸せだった。

「慧斗、キモチ良かったよ？」

「俺も」

姉さんがちよつと笑った後、深刻な顔になった。

幸せな時間の後に待っていたのは、まさに地獄だった。

別れ

「ねえ、慧斗。」

「何？」

「私、今日の事絶対忘れない。」

「それは俺の方だよ。」

「うん。」

沈黙。

僕にはその間の空気の意味が分からなかった。

「私ね神奈川戻るの」

大したことない、客観的に。
神奈川県に戻るくらい……。

「へ、へえ」

一応、そう返事した。

「元カレが戻ってこいって言うてるんだ。何回もメールきて、やっ

ぱりお前だけだつて。
あたしも、実家に戻ってきた理由の1つであいつんこと忘れたいて気持ちもあったの。
母さんの病状も今は一応落ち着いてるし、その…、…にはまたここに来るから」

姉さんのその声。さっきまでの喘ぎ声は嘘のようだった。
“元カレ”。
なんだよ…それ。
そんな気持ちしか上手く頭にまわらない。

最初で最後のセックスってこと？
元カレとヨリを戻すってこと？
僕は弟でしかないってこと？
さっきの行為は欲求不満を晴らすためだったってこと？
分からない。

「ごめんねっ…」

そう言い残して姉さんは神奈川へ行ってしまった。

数日後のことだった。その悪夢は。

母さんが死んだ。

末期ガンだから、仕方ないのか？ そんなことない。
不幸は何故、こんな続くんだろう。

姉さんは葬式を参加した。

でも何事もなくまた神奈川へ帰って行った。

家には父さんと僕の2人だけ。

加代子姉さんも母さんも逝ってしまった。

美代だって、他の男の所に行ってしまった。

別に、前と変わらないじゃないか。母さんがいないだけで…。

美代

俺はさ

いくつになっても
諦めたりしない。

ずっと待ってるよ。
珍しく本気なんだ。

ずっと愛してる。

それ以上でもそれ以下でもないよ。

だから、この気持ちだけ、受け取って。

別れ（後書き）

次回、エピソードで最終回です。

エピローグ

あれから、1カ月が経った。

僕の気持ちは変わらないまま。
加織の気持ちも変わらないまま。

変わったのは、静かな家。

そんな中、1つの贈り物が届いた。
差出人は美代。君からだ。

贈られてきたのは花だった。
ピンクの綺麗な花。

花言葉は、『満足』『温かい心』『愛らしい』です。

と、パソコンで打ってあるテガミが添えられていた。

多分、こういう意味だろ？

僕とのセックスは、満足だった、

君なら、そう言うでしょ。

ピンクの美しい薔薇は、静かになった僕の家を照らしてくれた。

エピソード（後書き）

今までクリックしてくれた方々、全ての方に感謝です。
有り難う御座いました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016v/>

姉サンに発情中

2011年11月13日09時31分発行